

かなり墨書が剝落しており、「空空空□」の四文字に部分的に墨が残るのみである。木簡は右上の一部を欠くが、四周に切削痕を残し、ほぼ完存に近い。右下隅に四mm×三mmの柄穴状の小孔が穿たれ、内部に木片を残す。習書木簡と思われる。积文については岸俊男先生の御教示を得た。

(関川尚功)

あいつぐ墨書土器の出土

——静岡県坂尻遺跡——

静岡県袋井市にある坂尻遺跡では国道一号線袋井バイパスの建設工事の事前調査として、一九八〇年一二月から発掘調査が行われており、本誌第四号に掲載された木簡の他にも、墨書土器が多数出土している。八二年三月に公刊された同遺跡の発掘調査概報によると二〇〇点余をこす墨書土器が出土している。同概報には二〇〇点余の墨書土器の积文と、代表的なものの积文とが載せられており、墨書中には「東京」「玉郷長」「駅子」「千山」「竹寸家」等がみえる。

・文献『昭和56年度一般国道一号線袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報——坂尻遺跡第二次調査——』
編集 浜松市中沢町一——袋井市教育委員会

京都・長岡京跡(1)

1 所在地 京都府向日市鶏冠井町十相

2 調査期間 一九八二年(昭57)五月～七月

3 発掘機関 向日市教育委員会

4 調査担当者 長谷川浩一

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の時代 八世紀末

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八二年度に長岡宮・京跡で木簡の出土した調査は六件あり(宮域一件、左京二件、右京三件)、その発掘は四機関にわたっている。

本稿は、向日市教育委員会が担当した左京第八九次調査の報告である。

調査地は東二坊大路と南一条条間大路の交差点にあたる。主な検出遺構には東二坊大路東側溝SD八九〇一と溝内の堰SX八九〇五、南一条条間大路南側溝SD



(京都西南部)

八九〇三とこれに架かる橋SX八九〇六、同溝に並行する溝SD八九〇二などがある。

木簡は東二坊大路東側溝SD八九〇一から三〇点、南一条条間大路南側溝SD八九〇三から五点の計三五点が出土した。

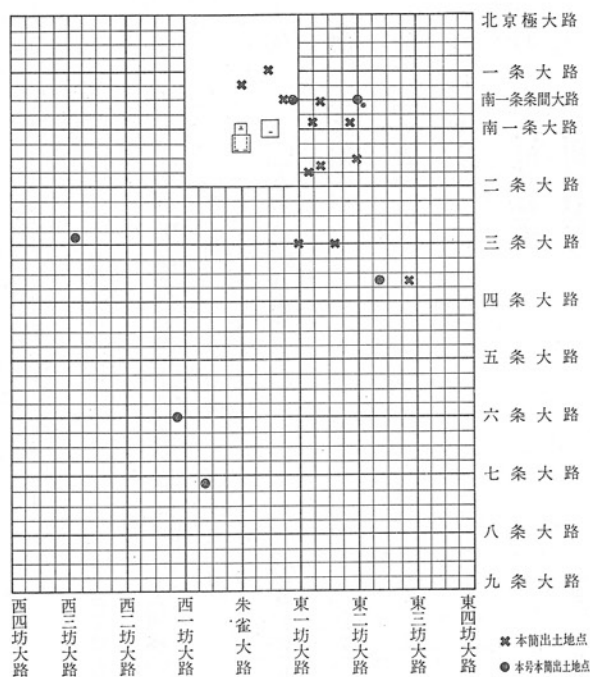
東二坊大路東側溝SD八九〇一は、幅一・五m、深さ〇・四mの素掘りの溝で、九五m分を検出した。溝の埋土は上・下二層に分かれ、下層は砂質の堆積土、上層は粘土質の埋立てた土であり、掘削当初は緩やかに南流していたと推定される。下層から延暦九年（七九〇）、下層上面からは同一〇年（七九二）の紀年をもつ木簡が出土しており、下層の下限が知られる。また上層が埋められたのは廃都（延暦一三年）頃と考えられる。

南一条条間大路南側溝SD八九〇三は、SD八九〇一に直交して東流する幅二m以上、深さ〇・四mの素掘りの溝で、調査地の北端で一八m分を検出した。やはり上・下二層に分かれ、SD八九〇一とはほぼ同時期に存続したと考えられる。南一条条間大路南側溝は、一九七七年の左京第一四次調査において、約三〇〇m西の南一条二坊六町域ですでに検出されており、木簡や「厨」等の墨書土器が出土している。

遺物は両溝の合流点の堰SX八九〇五と橋SX八九〇六付近にやや集中して出土する傾向がみられる外は、SD八九〇一の上・下層とSD八九〇三の下層全域にわたって出土した。特徴的な遺物とし

ては、SD八九〇三で一括出土した人形・斎串・墨書人面土器・土馬および櫛の祭祀用品があり、大路側溝での祭祀のあり方を考察できる好例の一つとなった。他に大量の土師器、須恵器、墨書土器、瓦片、曲物、箸、銭（和同開珎・神功開寶）などがある。

平安京では宮の東辺は諸司厨町がおかれた一帯で、長岡京においても調査地周辺には諸司厨町が形成されていたと推定されている。今回調査の出土木簡は、「位田并墾田」の題籤をはじめ、下級官人



長岡京木簡出土地点図

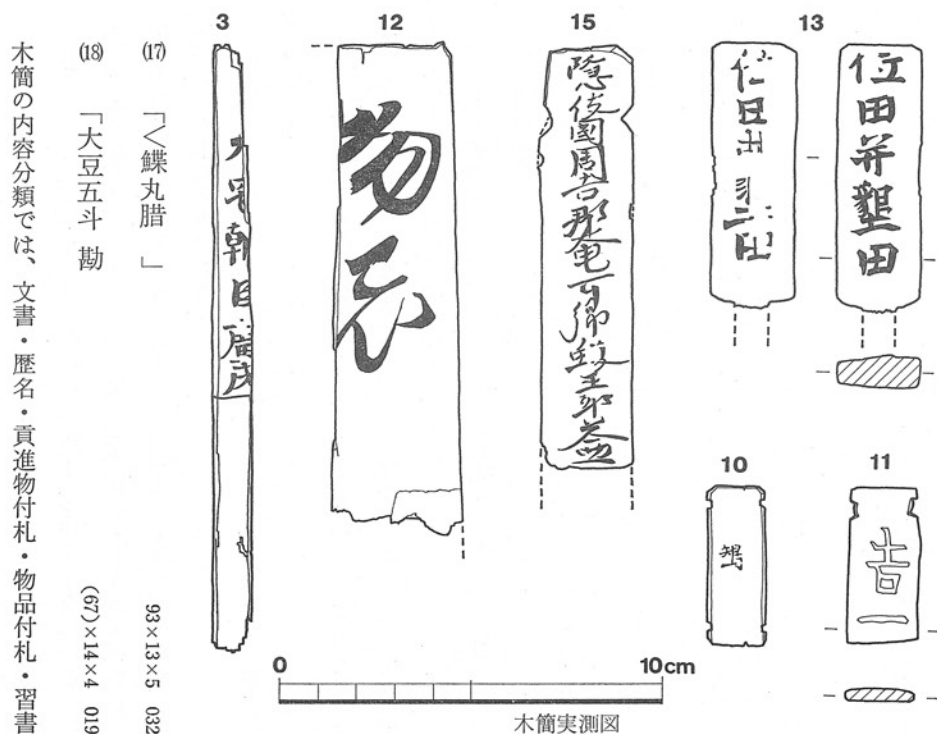
の歴名や付札など幅広い内容をふくんでいる。したがって、付近に公的施設が存在したことは確実と思われるものの、特定官司とのつながりを確認するには至らなかった。

8 木簡の釈文・内容

東二坊大路東側溝SD八九〇一

- (1) ・☐☐☐☐☐☐☐☐
〔司食カ〕 駆使四人
- ・「行右史生☐☐
〔宮カ〕 『雅万呂』
☐☐
(160)×(19)×3 019
- (2) ・「☐☐
〔司カ〕
舎×
☐☐
(83)×(15)×3 081
- (3) 大宅朝臣廣成一
〔刻線〕
☐☐☐☐☐☐
古麻呂 倭文諸世 辛鍛治堅万呂
(161)×(10)×8 081
(228)×(20)×(1) 091
- (4) ☐☐☐☐☐☐
古麻呂 倭文諸世 辛鍛治堅万呂
(228)×(20)×(1) 091
- (5) 「秦人足」
☐☐☐☐☐☐
牟義白万呂
65×22×4 065
- (6) ・☐☐☐☐☐☐
川瀬
☐☐☐☐☐☐
(171)×(19)×3 081

- (7) ・☐☐☐☐☐☐☐☐
〔マカ〕〔万呂カ〕 戸五斗
〔延曆カ〕
「☐☐☐☐☐☐☐☐
九年十月九日
163×18×5 051
- (8) ・☐☐☐☐☐☐☐☐
戸主別公浄道戸大伴嶋公正
〔米 伍斗カ〕
〔上人別秋〕
・☐☐☐☐☐☐☐☐
隅 延 曆 十年□月□日
(142)×15×5 033
(103)×24×4 039
- (9) ×☐☐☐☐☐☐
五戸三野部黒万呂
(103)×24×4 039
- (10) 「☐☐☐☐
鳩
42×14×7 031
- (11) 「☐☐☐☐
吉一
41×19×4 032
- (12) 「物忌
(130)×(34)×6 019
- (13) ・位田并墾田
・位田并墾田
(70)×22×8 061
- (14) 練☐☐☐☐☐☐
〔練カ〕
古 練
〔練カ〕
練☐☐☐☐☐☐
和
(581)×16×20 019
- 南一条条間大路南側溝SD八九〇三
- (15) 「☐☐☐☐☐☐
隠伎国周吉郡奄可郷蝮王部益×
(110)×25×3 039
- (16) ・斛一斗五升
一伊勢国
「☐☐☐☐☐☐
物 辨郡郡
116×33×3 011



- ・題籤・器物墨書(曲物)・削屑と、全ての種類が出土した。
- (1)は文書の断片で、駄使らの食料に関するものか。右史生は太政官右弁官所属の史生をいうので、この木簡に署名する宮雅万呂は、左京第一三次調査出土木簡中の推定太政官史生「雅万呂」と同人物であろう。「行……」とあるのは行・守の意味ではなく、職務を行う担当者を表わしていると考えられる。
- (2)も文書の断片で、某司の下の割書きは舍人であろう。
- (3)大宅朝臣廣成は天平感宝元年(七四九)に校生としてみえ(『大日本古文書』三二五六)、同人物と思われる。
- (5)秦人足は天平一一年(七三九)の写経司の校生(『同』七二二四)と、天平勝宝七年(七五五)の摂津国に遣わされた班田司算師(『同』四一八二)に同名がみえ、特に後者は年代からみて同人物の可能性がある。とすれば、算師という経歴をもつ人物の存在は、延暦一〇年(七九一)以降の埋土である同じ上層の近接地から(13)位田并墾田の題籤が出土していることと関連して、特定官司とのつながりを探る上で注目される。すなわち、このような題籤を必要とする官司としては、通例、民部省・京職などが想定されるからである。京城から出土しているので、例えば延暦一〇年八月の畿内班田使の任命に伴う臨時的施設が近辺に所在していたとも想像しうる。位田と墾田が併記される理由は吉田孝氏の研究が参考となる(『公地公民について』『続日本古代史論集』中巻所収)。

(8)は戸主名から書き始める正米の荷札である。貢進の各過程で記されたりしく三筆から成り、税を京へ輸す人を指すと思われる「上人」の記載がある。「上人」の記載は従来出土した木簡では越前国からの貢進物付札に限られており、また別氏の分布状況とから、越前国からの木簡とみておきたい。

(9)の五戸は五保(養老戸令五家条)の意味といい、長岡京では初出である。

(10)(11)は丁寧な作りの小型付札で、切り込みを「く」字型ではなく「コ」字型とする珍しい特徴をもつ。(11)は文字を線刻しており、用途は不明であるが吉祥札の一種であろうか。

(12)は木札に物忌と大字で記し、下部を空白とする。物忌札とする早期の例となる。

(清水みき)

京都・長岡京跡(2)

- 1 所在地 京都府長岡京市神足三丁目二〇二一
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)六月〜七月
- 3 発掘機関 長岡京市教育委員会
- 4 調査担当者 岩崎 誠
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代(八世紀末)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、共同住宅建設に伴い、長岡京跡右京第一〇二次(7A NMMK地区)調査として実施したものである。



(京都西南部)

当調査地は、平城京型条坊復元では、右京六条二坊四町にあたる。この調査地において、東西方向の溝二本が検出された。一方の溝(SD一〇二〇二)は、平安京期の遺物を出土し、他方(SD一〇二〇一)は、長岡京期の遺物を出土した。